

「乳房にしこりがあったらまず受診」 ～乳がんは女性に最も多いがん～

横浜掖済会病院

外科医長 松 本 千 鶴

1. はじめに

昨今のピンクリボン運動(乳がん撲滅)で、みなさんの乳がんに対する意識も高まっていることと思います。現在の日本において、乳がんは女性に最も多いがんといわれ、女性の約15人に1人が乳がんになるといわれており、年間約1万人以上が亡くなっています。

また乳がんにかかりやすい年齢は、40歳前後を境に急激に増加し、まさに女性にとって“脂”がのり、人生で輝いているときになりやすいがんともいえます。

乳がんは女性にとって怖いがんの一つではありますが、見つかりやすく、治りやすいがんともいえます。今回は診断と治療について紹介させていただきます。

2. 乳房のしこりに気づいたら

乳がんは検診で見つかる場合もありますが、多くは乳房のしこりを自覚して見つかります。しかし、痛くもなく“乳がんだったらどうしよう…”と思っても乳房は診察で少し見せにくい場所でもあり、受診をためらうケースが多くみられます。

ひとことで乳房のしこりといっても悪性腫瘍(いわゆる乳がん)だけでなく、良性疾患(線維腺腫、乳腺症、のうほう嚢胞)などのこともあります。

乳がんは、乳腺(おっぱいが造られる部分)から発生する悪性腫瘍(がん)です。代表的な症状は、痛みを伴わない乳房のしこりですが、大きくなってくると痛みを伴うこともあります。また、皮膚の発赤、えくぼ、乳首の変形、乳首か

ら血液混じりの分泌物が出るなどの症状も出てくる場合があります。

胃がんや大腸がんなどの消化器がんに比べて、乳がんの初期には食欲不振、体重減少、体調不良などの全身症状を伴わないことが多いため、すぐに受診しなくても生活に差し支えないことが多く、乳房の変化に気づいていてもなかなか受診しないうちに乳がんが大きくなってしまったというケースもみられます。

乳房にしこりや異和感を感じ、普段とは違う小さな変化に気が付いたら、気軽に外科(乳腺外科、乳腺外来など)を受診することがまず大事なことです。

3. 乳がんの診断

乳がんの代表的な検査は、マンモグラフィー(乳房のレントゲン写真)及び超音波です。マンモグラフィーではしこりが発見できるほか、しこりは触れないが、小さな石灰化したがん(非浸潤がん)が見つかることもあります。乳房をつぶしてレントゲン写真をとるため、少し痛みがありますが、大事な検査です。超音波は痛みがなく、また簡便に検査ができ、実際のしこりの性状や大きさなどがわかります。しこりがあった場合には、細い針で細胞を取る検査(細胞診)や、ボールペンの芯ぐらいの細さの針で組織を採取する検査(針生検)を行います。

これらの検査で、乳がんと診断された場合には、CT(コンピュータ断層撮影)やMRI(磁気共鳴画像装置)などの検査でしこりの広がりや、

転移(リンパ節、肺、肝臓など)がないかを判断し、実際の治療に移ります。

4. 治療は？

乳がんは発見されたときから、全身病として考えます。

治療は局所療法と全身療法に分かれ、局所療法は手術や放射線治療、全身療法は抗がん剤やホルモン剤などによる治療となります。

肺や肝臓などの遠隔転移がない場合、基本的には手術が第一選択となります。手術には、乳房の一部をとる乳房温存術と、乳房をすべて取る乳房切除術があります。乳房を温存できるかどうかは、しこりの大きさによりますが、一般的には3cm以内の腫瘍であれば乳房温存が可能です。現在は、手術の技術も発達し、乳房切除をした後でも形成外科と連携をとることにより、乳房再建をし、乳房をきれいに作り直すことも可能となりました。また、しこりが大きかったり、^{わき}腋の下^{わき}のリンパ節に転移があることが術前に判明したときには、手術に先駆けて抗がん剤治療を行う(術前化学療法)ことにより、腫瘍を小さくすることも可能になり、乳房温存手術にすることも可能となりました。

以前は手術の際には、腋の下^{えき}のリンパ節^{かかくせいじゅつ}をすべてとる、腋窩郭清術が多く行われ、手術した方の腕がむくむなどのリンパ浮腫が多く見られました。現在では、術前にリンパ節転移がないと判断された場合には、見張りのリンパ節のみの手術(センチネルリンパ節生検)をすることにより、リンパ浮腫の発生を防げるようになりました。

全身治療は、抗がん剤による化学療法とホルモン療法に分かれます。多くの患者さんで、術後の補助化学療法が行われていますが、病気の進行度や、ホルモン感受性の有無によってどんな薬剤を使用するかが決まってきます。

再発、転移が見つかった場合には、その症状などに合わせて、治療を行います。乳がんは固形腫瘍の中では使える薬物が最も多いがんの一つであり、息の長い治療を根気よく行っていくこととともに、周囲の支えや励ましも大事になってきます。

5. 乳房を大事にしてください

現在、乳がんの診断、治療を取り巻く環境は以前とはずいぶん変わり、専門の乳腺外来や女性医師による乳房診察、検査を担当する女性技師が増加しています。

しかし、日本では乳がん検診の受診率が低く、欧米の7-8割に比較して、3割以下と、低いのが現状です。

乳がんは早期に見つければ90%が治るといわれています。気になる場合にはぜひ一度、乳房の診察や検診を受けてみてはいかがでしょうか。